

東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち（4）

木 畑 和 子

5. キンダートランスポート

1938年の11月ポグロムは、ナチの容赦のないユダヤ人追放政策を示した。そのポグロムの過酷さは、それまでにユダヤ人たちの入国を厳しく制限するようになっていた諸外国に大きな衝撃を与え、特にイギリスはユダヤ人の子供に対する救助の手を差しのべるようになった。ナチの政権掌握以降1939年末までに、19,149名のユダヤ人の子供が親と離れてドイツから出国し、他のヨーロッパ諸国やパレスティナ、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリアに向かったが、そのうちの12,395名が11月ポグロム以降の1年間での出国者数であり、その大半がイギリスに渡ったのである。

このような子供の出国は主にキンダートランスポートと呼ばれる救出活動を通して行われた。この運動について関心がもたれるようになったのは、1990年代になってからであるが、それを担ったドイツのユダヤ人組織については、史料がほとんど残っていない¹⁾。またこの組織の活動について知っている「子供」は、出国時の年齢からいっても当然少ない。キンダートランスポートの関係者の存命中（後に触れるノルベルト・ヴォルハイム²⁾などを除く）には、前述のようにキンダートランスポートに関心がほとんどむけられていなかったため、送り出し側のドイツでの状況の詳細は十分解明されていないのである。ここでは本稿でのインタビュー対象者の出国の背景についておおむねの概要を記しておきたい³⁾。

キンダートランスポートのドイツ側担当部局はベルリンのドイツ在住ユダヤ人全国代表機関（以下、「全国代表機関」と表記）の児童出国課

であった。キンダートランスポートで子供を出国させようとした親は多くの場合、近くのユダヤ人ゲマインデやラビを通して児童出国課に申請を行った。11月ボグロムによってユダヤ人組織の事務所は閉鎖されていたが、11月半ばには責任者のケーテ・ローゼンハイム⁴⁾が自宅を臨時事務所とし、12月には事務所での業務を再開したのである。

イギリス政府が、11月ボグロムを受けて同月21日に子供たちの入国ビザ免除を決定した結果、子供たちのイギリスへの大量出国が可能になったが、ベルリンの児童出国課事務室の机には出国を望む親たちの手紙や大量の書類が山積みとなり、職員たちはイギリスとの電話連絡や、不安にかられて事務所に殺到した親たちとの対応などにおわれ、大変な混乱状態となった。職員にはソーシャルワーカーが多く、緊急に大勢の子供を外国に送る業務には実務能力が不足していた。

そのようななか、ヴォルハイムがキンダートランスポートにかかわることを要請された。彼は子供の名簿作成をはじめとして、イギリス内務省やささまざまな難民救援委員会、子供の里親⁵⁾となる人間との連絡、イギリスとゲシュタポへ提出する書類の作成、親への出国日の通知、地方の子供をベルリンに集合させるための手配、列車と待合室の予約、子供の病気や突然の辞退による出国者リストや関係書類とその写しの作成し直し、駅での親子の別れで混乱を生じさせないための手配、イギリス行き列車への添乗など、ありとあらゆる仕事をこなしていった⁶⁾。

緊急大量出国業務のなかで、児童出国課では、そのやり方について対立も起こっていた。ローゼンハイムは全国代表機関の「合法主義」路線に従っており、そのために「非合法」的手段をとって少しでも多くの子供を助けようとした職員と対立した。こうした職員たちが、一つの出国グループの人数が100人から300人と多い場合には、ゲシュタポに気づかれることなく何人か子供を余計に加えて送り出したり、子供たちの首にかける人数分の番号札の一部を持ち帰り、次回以降の出国にまわしたりしたことに對して、ローゼンハイムは激しく抗議した。しかしその彼女も、11月ボグロムで強制収容所に収監されたあと釈放された18歳以上の青少年をキンダートランスポートで出国させるために、実際よりも若い年齢になる偽りの生年月日を書類に書き込むことなどということはしていた。

このキンダートランスポートの活動はユダヤ人人口の減少を意味した

ため、ナチがそれを阻害する政策をとることはなかった。ここでもナチの積極的なユダヤ人出国政策方針が見てとれる。ローゼンハイムは、ナチの諸官庁と児童出国課との間には何らの困難もないこと、問題は人員不足にもかかわらず、できうる限り多くの子供を出国させようとするナチの強い圧力と、定期的な報告書提出業務の負担であると記している。

またヴォルハイムも、警察が出国する子供に関する詳細な書類を要求してきたことが負担であったが、その警察も開始時には出国業務に関してきわめて協力的で、多くのユダヤ人の子供が出国して行くことに満足そうだったと、記している。他にもゲシュタポが非常に協力的であったという地方事務所職員の証言がある。親衛隊全国指導者兼ドイツ警察長官のヒムラーは、書類が整っていればできる限り早急に子供の身分証明と旅券を交付するという布告（38年12月21日）を出していたのである。こうして、ベルリンの児童出国課は38年12月から39年7月まで間に、5,281人の子供を出国させることができた⁷⁾。

さて、このように多くの出国希望者が存在し、膨大な業務が短期間になされたなかで、いかなる子供がキンダートランスポートで出国できたのであろうか。

11月ボグロム後のキンダートランスポート開始について広報はなされず、ユダヤ人の間に口コミで伝わったということのみを指摘しておきたい。ドイツとオーストリアには6万人もの子供がおり、その人数に対して出国させることができる絶対数が少なかったのである。

初期には逮捕の危険がある少年、国籍を失った子供、孤児院の子供、父親が収容所に入れられた子供、ユダヤ人人口の少ない地方小都市在住者（目立つためにひどいいじめにさらされている場合が多い）などが優先された。こうした子供たちは緊急性が高いと判断されたのである。

緊急性が少ない子供の親たちの多くは、直接イギリスで新聞広告を出したり、親戚・知人のつてなどを通して、イギリスでの子供の保証人や里親を探したりした。それが得られた場合にはキンダートランスポートに子供を加えることができた。翌39年3月ごろより、緊急性の高い子供の割合が減らされ、すでに保証人や里親を見つけた子供や子供の「適性」も重視されるようになった。各ユダヤ人ゲマインデのソーシャルワーカーの面接などによる子供の「適性」観察や医師による詳しい健康診断書（虫歯まで）の作成が求められ、また子供が非ユダヤ人の家庭に

引き取られることを了承するかどうか、親の意思を確認することが職員の仕事となった⁸⁾。

子供たちの出国順がどのように決められたかについては、よく分からない。ごく初期の段階ではあるが、バーサ・レヴァトン女史の父親は、偶然子供の友達の話からキンダートランスポートのを知り、ユダヤ人団体の福祉事務所（ミュンヘン）で、自分の子供をキンダートランスポートに加えなければ、このキンダートランスポートのことを友人全部に教えると強く言ったところ、子供2人をミュンヘンから最初のキンダートランスポートに加えることができた。彼女はキンダートランスポートのリユニオンを1989年に組織し、キンダートランスポートの歴史を掘り起こすにあたって、大きな功績があった女性である。

キンダートランスポートについての作品も書いている作家のロア・シーガルの場合には、父親がキンダートランスポートの噂を聞きつけて、ウィーンのユダヤ人信徒団体の事務所に親子で申し込みに並んだ。その事務所には母親のいとこのガールフレンドが働いており、その彼女が列で待っている数百人の子供の中からシーガルの名前をリストに入れてくれたため、ウィーンからの最初のキンダートランスポートに加わることができた⁹⁾。

事態が急速に悪化していくなか、わが子の早期出国を願うあまり、パニック状態になった親たちもおり、事務局が「えこひいき」で子供を選んでいるのではないかと非難を受けたが、そのような親たちには لندنからの許可が与えられた子供だけしか連れて行けないことを何度も説明しなくてはならなかった、とヴォルハイムは記している¹⁰⁾。全国代表機関に登録しながら、結局出国できなかった子供の人数は39年末に10,833名にのぼるが（内259名はすでにイギリスから入国許可を得ていた）、これはこの組織を通して出国できた人数の約2倍となる¹¹⁾。

出国の受け入れ先がほとんどなく、生命の危険も抱くようになった親たちが、上記のような行動を取ったり、コネで助けられたりした例がどの程度あったかはわからないが、他にもいくつかのケースが知られている¹²⁾。後述する本稿の④ゲートマン氏の場合も、他の人がリストの彼らの名前の上に入ったため、長兄は出国できず、死亡した。いずれにせよ、里親が見つかった場合は別であるが、最終的に入国を認めるのはイギリスの団体とはいえ、その申請書類を送るのはドイツ側であり、そこには

判断の幅があったといえるだろう。とはいえ、職員に関していえば、自分の出国よりも子供たちの送り出しの使命を優先したために、結局強制収容所行きになり、命を失ったキンダートランスポートの関係者も少なくない¹³⁾。

キンダートランスポートの家族は、子供だけでも先に出国させ子供を不安な状況から助け出そうとしたが、出国した子供が、イギリスで残った家族に仕事を見つけ、家族を救出するというのを期待された場合も多かった。本稿で対象にした人々のうち、自分で家族を救い出すことができた人はいないが、「子供たち」の手記集を読むと、実際に親に庭師やメイドの職を見つけ、救出した例も伝えられている¹⁴⁾。

こうしてキンダートランスポートに加わることができた子供たちは、イギリスに向けて出発していった¹⁵⁾。しかし、彼らの出発時には、いろいろな嫌がらせも経験しなければならなかった。11月ポグロムのあとの第1回目のキンダートランスポート（12月2日）の添乗¹⁶⁾をしたヴォルハイムは、子供たちがベントハイムで国境を越える際に行われたドイツ側の嫌がらせを次のように伝えている。

国境には通常の税関職員ではなく、SS（親衛隊）隊員が配属されており、子供たちの荷物のチェックの際に、荷物の中身全部を床にぶちまけたり、練り歯磨をもっているとその中に宝石や外貨など隠していないか調べたりした他、荷物の一部を奪うなどしていた。あまりに荷物チェックに時間がかかったので、汽車はイギリス行きの船便に間に合わせるために、子供たちが乗ってきた車両を切り離して出発してしまった。オランダ側で子供たちを待っていたトルース・ヴェイスミュラー夫人がベントハイムまで来て、SS隊員に猛然と抗議した結果、次の列車は前便の2車両をつけて定刻どおり行くことができた。ヴェイスミュラー夫人は12月5日にオーストリアに行き、アドルフ・アイヒマンと直接交渉し、ウィーンからの第1回目のキンダートランスポート（12月11日）実行に功績があった女性である。SS隊員はヴェイスミュラー夫人の抗議には従ったが、下記のインタビュー記録にもあるように、出国者に対する嫌がらせは続いた¹⁷⁾。

① ウルズラ・デーリング

1939年1月、彼女が17歳半の時に12歳の弟と一緒に、キンダートラン

スポーツでイギリスに出国することができた。あと半年遅かったら年齢制限にかかって、出国は不可能だった。キンダートランスポートの渡航費用を誰が払ったのかは知らない。家が貧しかったので、両親が払ったとはとても思えない¹⁸⁾。

出発の日、駅には父親だけが送りに来た。母親は別れがつかつたのだと思う。別れの時、父親が「ウルズラ、できるだけ早くドイツに戻って社会主義国家を作るんだよ」と言った。そのあと母親も出国できたが、戦後彼女は母と弟を残して、父親の言葉を守り、一人でドイツに戻った。母は、ドイツ人は残酷だといって、ドイツを拒絶し、ドイツに戻ることはなかった。

イギリスではポーランド出身のイーディッシュを話すトーチ夫人が引受人だった。ワルシャワ・ゲッター出身で、第一次世界大戦後にイギリスに渡ったという彼女は真の「ジューイッシュ・マザー」といえるような、とても親切な人だった。キンダートランスポートのことを知った彼女は、年齢の高い女子がよいと、彼女を選んでくれた。知り合いでも何でもない、それまでまったく関係のない人だった。トーチ夫人はそれほど豊かではなかったので、弟も引き受けてもらうのは無理だった。彼女のところには18歳になるまでの半年間いたが、そのあともコンタクトをとっていた。

弟には癲癇の病気があったが、母親はそれを秘密にしたので、キンダートランスポートに加わることもできた¹⁹⁾。弟を引き取ってくれたイギリスの家庭ですぐに発作を起こしたため、その家庭から出され、ユダヤ人用の児童施設に入った。しかし、そこでユダヤ人かどうか疑われ（「連載（1）」参照）、弟がショックを受けていたので、カプートにいた先生が創設したスコットランドの児童施設に入れてもらった。そのあと、弟は庭師となったが、21歳の時に温室で発作を起こし、温室の暖房装置に倒れてしまい、死亡した。彼女は、東ドイツにいたので、弟の葬儀に行くことはできなかった。

② ヘルガ・エーレルト

母がキンダートランスポートのことを聞きつけ申し込み、弟とイギリスに行くことができた。キンダートランスポートについて、ユダヤ人たちはみな知っていた。両親がポーランドへ出発する約一か月前の6月30

日、イギリスに到着した。子供たちのポーランドのパスポートは、父が祖母をポーランドに送ろうとした際、ポーランドで準備した。エディンバラの親戚が引受人となった。彼女は16歳を少し越えたばかり、弟は14歳で、バーミツバをすでに済ませていた。

両親と別れるのはつらいことだった。二度と会えないことを予感していた。ライプチヒ駅で彼女は大変興奮して、転んでしまった。両親、祖母も泣いていた。自動車にはライプチヒからのキンダートランスポートの子供が大勢乗っていた。ハンブルクから船でサザンプトンに着き、自動車で行った。パディントン駅かヴィクトリア駅でキンダートランスポートの子供たち7~80人のなかで真っ先に彼女たちが呼ばれた。エディンバラ行の自動車が出発するためだった。

彼女たちはライプチヒですでに英語の個人レッスンを受けていたので、英語は話せた。エディンバラ駅ではおばとおじ、父のいとこ夫妻が迎えに来てくれていた。後に、おばが説明してくれたところによると、最終的にはエディンバラのシナゴグのラビがドイツやオーストリアのユダヤ人の子供たちの救出を訴えたので、おばが彼女の引き受けを決意してくれたという。

おばたちは非常によくしてくれた。エディンバラのユダヤ人ゲマインデにも連れて行ってくれ、そこで多くの友人を得た。しかし、おばには母性的なものが少し欠けていたように彼女は思っている²⁰⁾。

③ アルフレート・フライシュハッカー

彼の住むヘリンゲンから、彼のみがキンダートランスポートに選ばれた。子供の数自体も少なかったとはいえ、なぜ自分だけが選ばれたのかは分らない。彼は15歳だった。彼の故郷でホロコーストを生き延びることのできたユダヤ人は、他にもう一家族のみである。

キンダートランスポートでの出国の通知を受けてから、出発まで4週間ぐらいあった²¹⁾。モスバッハで手続きしたが、警察署では犯罪歴はないという書類を作成してもらった。フックからヘリッジを経由して、リヴァプールストリート駅に到着した。ヘリンゲンではすでに3年間英語を習っていたが、話せなかった。

両親はイギリスの裕福ないとこの女性が息子を引き取ってくれることを期待していた。しかしそのいとこの迎えはなく、車でゴールドアズグ

リーンに住むラビ一家のところに連れられ、そこに3週間滞在した。あとで分かったことだが、その車の運転手はいとこの運転手だった。いとこは非常に裕福だったが、彼を受け入れようとはしなかった。

④ クルト・グートマン

母は子供を助けようと出国先を探すのに懸命だったが、16歳の長兄のハンスはキンダートランスポートに加わるには年齢が高く難しかった。兄には庭師の仕事も見つからなかった²²⁾。母親はキンダートランスポートでオランダ²³⁾に子供を送ることを望んでいた。第一次世界大戦中、オランダが中立国であったことから、再び戦争が起こるようなことがあっても、また中立を保ち子供は無事だと考えたのだ。

ハンスとクルトはキンダートランスポートでオランダに行けることになり、出発日も決まっていた。しかし、豊かな家庭の子供が出国リストの中に割り込んできて、オランダ行きは絶望的になってしまった。結局、クルトのみがイギリスへ出国できた。もしオランダに行っていたら、ドイツの占領によって兄弟とも殺されていたかもしれない。

キンダートランスポートでクルトが次兄のいる慈善孤児院に入ることが決まり、母は兄弟で同じ孤児院で生活できることを大変喜んだ。母は最後に残ったささやかな財産であるクレフェルトの家を売って、子供の身支度を整えた。母は靴と暖かい上着を買ってくれた²⁴⁾。母はすでに銀のカトラリー類、亡くなった夫のかたみの結婚指輪まで放出させられていた²⁵⁾。当時未亡人は、亡夫の結婚指輪を自分の結婚指輪を重ねてはめる習慣があったが、母は夫の指輪の代わりに自分の指輪が二重に見えるように、中央に溝を彫ってもらっていた。

クルトの出国手続きのため母親はデュッセルドルフに行ったが、ゲシュタポ本部では出国したら二度と戻らないとサインさせられた。何日に出発したのかははっきり覚えていないが、6月末頃で、彼が12歳の時だった。母は彼がホームシックにならないように家族のアルバムを持たせてくれた。国境を越える時に、皆で“Nun ade, du mein lieb' Heimatland...”を歌った。この歌は移民たちが歌った歌で、国境にいたSS隊員が怪訝そうにこちらを見ていた。

スコットランドの孤児院に到着すると、すぐに家族のアルバムや他のドイツを思い出させるようなものは没収された。孤児院の院長の子供に

対する扱いは冷淡だった。次兄も自分に非常に厳しく当たった。兄はフリッツという名前がドイツ的であると名前をフランクに変えさせられていたが、戦後も名前をもどさず、苗字までグッドマンに変えた²⁶⁾。

残された長兄は1942年母が強制移送される時、まだ移送の対象とはなってはいなかったが、母を一人で行かせるわけには行かないと、一緒に移送されていった。クルトはそのことに関して、長兄を誇りに思っている。

⑤ ヘラ・ヘンドラー

キンダートランスポートは彼女が15歳、妹が14歳の時だった。出発までの母との別れについては妹が十分に語っているので、加えることはない。その妹が受けたインタビューによれば、母はハンカチーフから靴下まで、ありとあらゆるものに、刺繍で素敵に名前をつけてくれた。彼女たちはイギリスに出国できる日を興奮して待ち望んだが、同時に母を置いていくという恐ろしさも強く感じていた。

39年7月キンダートランスポートで出発するにあたって、母がハンブルクにきてくれた。母は自制心が強く、いつも自分たちを支えてくれた人だったが、駅で突然、その苦しみの感情を表に出した。その姿はとても衝撃的だった。その姿を一生忘れることはできない。妹は、父親に関しては最後の食事の姿を思い出せるのだが、母親の幸せな顔を思い出したくも、その苦痛にみちた顔しか思い出せない。彼女たちも母親も、必ず再会できると強く確信して、母親の写真をもっていかなかったが、母のパスポート用の写真がただ一枚残っている。その原板が写真館に残っていたのだ。

彼女たちはハンブルクからヘリッジを經由しハーディングについた。旅の途中の様子は、彼女たちがキンダートランスポートのグループの最年長ぐらいだったということと、世話をした3、4歳ぐらいの子供たちが、恐ろしく泣きじゃくっていたことその他、リヴァプールストリート駅の真っ暗な建物やロンドンの霧が深かったことぐらいしか、覚えていない。

駅では他の小さな子供たちが次々引き取られていき、彼女たちを含めて5人ぐらいが残された。子供たちだけで、ブルームズベリーの難民委員会に行くように言われ、どうにかたどりついたが、その難民委員会も

ごったがえしで、大変な混乱状態だった。その日にか預かり先を見つけてくれたが、それはブライトン近くの未亡人宅だった。しかしその未亡人は小さな子供を二人と思っていたにもかかわらず、彼女たちが来たので、とても当惑していた²⁷⁾。

⑥ ギゼラ・リンデンブルク

39年1月、彼女が13歳の時、にハンブルクからキンダートランスポートでイギリスに行った。ハンブルクのユダヤ人ゲマインデの建物の前からバスで出発したが、これが一生の別れになるとは思わなかった。イギリスにいたおじの知り合いが保証人になってくれたのだと思うが、その人が仲介してくれてピーターズフィールドの寄宿舎に入った。

⑦ インゲ・ラメル

彼女より2週間前に姉がハンブルク経由でイギリスに渡った。彼女は、オランダ経由でイギリスに渡ったが、駅での両親との別れはほとんど憶えていない。すべて忘れてしまい、どこの駅から出発したかということさえも思い出せない。両親も出国できると信じていたし、これが一生の別れだとは思わなかったからだ。キンダートランスポートでの出国は彼女が15歳の時だった。母親がデザイナーだったので、荷物を素敵につめてくれた（その彼女の荷物をつめたトランクは今、ベルリンのユダヤ博物館に収められている）。

彼女たち姉妹の引き受け手はヨークシャーのシェフィールドのセカンダリースクールの3人の独身女性教師だった。彼女を引き受けてくれたのは美術教師で、その人のもとに住み、姉は他の同居する2人の教師のもとに住んだ。この先生たちの年齢は40歳半ばで、一人はもっと年をとっていた。ドイツのユダヤ人の子供を、自立するまでの期間引き受け、その保証人となることは生易しいことではなく、これは高く評価されなくてはならないと思う。

両親がどのようにこの人々の住所や名前を知ったのか分からないが、両親は懸命に引き受け手を探していた。救援組織が父に住所を渡したのかもしれない。また、彼女たちがどうして選ばれたかも分からないが、いずれにせよこれは「選別」を意味するものだった²⁸⁾。

保証人になってくれた先生のみならず、生徒たちも彼女たちを快く受

け入れてくれ、校長先生も、彼女たちに親切に言うように言っていた。この学校は他に3人のユダヤ人の子供を迎え入れており、本当によい雰囲気だった。このように温かく迎え入れられたことはドイツではなかったことで、本当に素晴らしいことだった。彼女たちは他のキンダートランスポートの子供たちのなかでも恵まれていたと思っている。

⑧ マリアンネ・ピンクス

彼女は自宅でユダヤ系イギリス人の老婦人に英語を習っていたが、その女性がロンドンの親戚に仲介してくれたのではないと思う。39年4月彼女が15歳の時にキンダートランスポートでイギリスに向かった。駅には父親だけが送りに来てくれたが、父親が泣いたのを見たのは、それが初めてであり、また最後となった。

キンダートランスポートではかつてのクラスメートと一緒にだったが、その人は豊かな家庭の出身で、親がシーツまで持たせたために大変な荷物となった。ロンドンの駅の待合室のホールで、里親が子供を選んだのだが、そのような荷物の多い子供を誰も引き取ろうとしなかった。彼女は友人の行き先が決まるまで一緒にいたいと、ずっと駅で待っていた。駅の待合室は暗い部屋でドアが開くたびに、外の明るさのために入ってくる人のシルエットが見え、今度こそと思ったけれど、だめだった。親の愛情が、その友人に不運を与えたようで、本当に悲劇だと思った。結局友人はいったんホテルへ収容され、そこから労働者の家庭に引き取られた。

彼女の引受人となったのは、子供のいない電気製品関係の間屋を営んでいる50代の夫婦だった。おそらくその夫婦は、自分の娘のようにしたかったのだと思う。小さい子供だと手がかかるからと、年齢の高い彼女を引き取り、とても大切にしてくれたが、気持ちの行き違いがしばしば起こり、お互いに大変だった。

⑩ ウルズラ・ヘルツベルク

39年5月、彼女が17歳の時、全く一人でイギリスのおじのもとに出発した。彼女は一人っ子であり、母を一人残すことになったので、別れはとてもつらいものだった。汽車がオランダとの国境に着いた時、ユダヤ人はパスポートを取りあげられ、汽車から降ろさせられた。他にもユダ

ヤ人の子供が二人いた。列車からパスポートが投げ捨てられ、汽車は走り去ってしまった。次の汽車でオランダに入ることができたが、汽船への連絡に間に合わず、イギリスに行けなくなってしまった。これは明らさまな嫌がらせだった。オランダの難民委員会のメンバーの家に泊めてもらったが、このような国境警察の嫌がらせはよく行われたようだった。

⑫ エスター・ゴラン

彼女はユーゲント・アリヤーのメンバーで構成されたキンダートランスポートで1939年3月25日、15歳の時ドイツを離れた。12人の小さなグループだったが、その付き添い役は19歳の青年だった。駅での別れは悲しかったが、これが両親との最後の別れとなると思わなかったので、何の不安もなかった。

オランダとの国境で、荷物検査のために荷物をもって汽車から降りるように言われた。付き添いが全員のパスポートを預かっていた。検査が進んで、彼女を含め子供たちの半分が汽車に戻った時、残りのグループ、荷物、パスポートをもった付き添いを駅に置いたまま汽車が出発してしまった。これは本当にショックなことだった。汽車は定刻に出発しなくてはならないのに、わざとユダヤ人の出国検査に時間をかけるという嫌がらせはよく行われたようだった。最後の瞬間までユダヤ人に屈辱を与えたのである。

オランダの国境警察が彼女たちをドイツに送り返すのではないかという強い不安にかられた。汽車は少し走ってオランダ側で止まり、オランダの役人が入ってきた。彼らはこのような出来事に慣れており、フリシngenの港まで行って、その駅で待つように言われた。駅では呆然自失状態だったが、どうにかベルリンのユダヤ人機関に電話をして、助けを求めた。するとまもなく、オランダのユダヤ人ゲマインデから数人の婦人が来てくれた。彼女たちはエスターたちに食べ物と飲み物を与えてくれた。ユダヤ人にバターを売ることが禁じられ、バターつきパンなどもう数年来口にしていなかったので、本当に嬉しく、他の人が目を離したすきに、バターをスプーンにとって直接食べてしまった。残りのグループと合流するため、オランダで一泊してイギリスに向かった。

イギリスに到着後、エディンバラに向かった。バルフォア宣言を行ったバルフォア卿のエディンバラ郊外の別荘がユーゲント・アリヤーのた

めの農業学校となっており、そこに入った。パレスティナかイギリスの海外領土に行けるように、2年間の農業と庭園業の訓練を受けることになっていた。その施設では、子供たちの間でもいざこざが絶えず、またスコットランド人の寮長がドイツ的なものに対して批判的で、イギリスの規律をもたらしようとしたことから寮長と子供たちの間でも摩擦が生じた。

妹は、おばがロンドンで引き受け手を見つけてくれたため、キンダートランスポートで出国することができた²⁹⁾。

注

- 1) Curio, Claudia, *Verfolgung, Flucht, Rettung. Die Kindertransporte 1938/39 nach Großbritannien* (Berlin, 2006), 16, 25, 30. 出国した子供のうち、その3分の2がユダヤ人救援組織を通じたものであった。
- 2) ヴォルハイムは青年運動の指導者で、当時25歳だった。彼自身、家族での出国を試みていたが、この業務に従事したことにより、結局家族全員が出国できず、彼を除き全員がホロコーストで殺害された。彼はアウシュヴィッツから奇跡的に生還できた。Harris, Jonathan/Oppenheimer, Deborah, *Into the Arms of Strangers. Stories of the Kindertransport* (New York/London, 2000), 77-78, 119, 239.
- 3) キンダートランスポートの成立過程、受け入れ側のイギリスの状況、組織などについては下記の拙著で触れており、本稿では送り出し側のドイツにおける子供の出国状況を中心に扱いたい。木畑和子『キンダートランスポート ナチス・ドイツからイギリスに渡ったユダヤ人の子供たち』(成文堂、1992年)
- 4) 木畑和子「東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち(2)」(『成城文藝』第197号。以降「連載(2)」と表記)、102頁注25、110頁参照; Maierhof, Gudrun/Schütz, Chana/Simon, Hermann (Hrsg.), *Aus Kindern wurden Briefe. Die Rettung jüdischer Kinder aus Nazi-Deutschland* (Berlin, 2004), 205-221.
- 5) 入国した子供たちの世話は経済的な負担をはじめとしてすべて、イギリスの「ドイツの子供保護運動」(Movement for the Care of Children from Germany)などの民間団体が担うことになっており、それらの団体を介して子供たちは里親のもとに預けられるか、あるいはそのような引き受け手がない場合はホステルなどに収容された。
- 6) Curio, *Verfolgung*, 46-47, 49-50.
- 7) 中央の全国代表機関児童出国課の「合法」路線に対し、地方や支部、またパレスティナ局はしばしば「非合法」的手段で青少年を出国させようとしていた。Maierhof/Schütz/Simon (Hrsg.), *Aus Kindern wurden Briefe*. 56-

- 57, 218; Maierhof, Gudrun, “Wir hatten gehofft, mehr Kinder zu retten“, in : Hansen-Schaberg, Inge (Hrsg.), *Als Kind verfolgt. Anne Frank und die anderen* (Berlin, 2004), 61-62; Leverton, Bertha/Lowensohn, Shmuel (eds.), *I Came Alone. The Stories of the Kindertransports* (Sussex, 1990), 359-360; Curio, *Verfolgung*, 56.
- 8) Curio, *Verfolgung*, 58-62, 77-79, 86-88.
- 9) Göpfert, Rebekka, *Der jüdische Kindertransport von Deutschland nach England 1938/39. Geschichte und Erinnerung* (Frankfurt a.M./New York, 1997) 69; Harris/Oppenheimer, *Into the Arms of Strangers*, 82, 87-88; Hill, Paula, *Anglo-Jewry and the Refugee Children* (PhD. Thesis, University of London, 2002), 63-64; Segal, Lore, *Other People's Houses* (New York, 1958/1994), 25.
- 10) Leverton/Lowensohn (eds.), *I Came Alone*, 360.
- 11) Curio, *Verfolgung*, 62-63.
- 12) Leverton/Lowensohn (eds.), *I Came Alone*, 73-74, 326; Curio, *Verfolgung*, 93.
- 13) ローゼンハイムは41年1月にアメリカ合衆国に出国することができたが、身元保証人は物理学者アインシュタインであった。Maierhof/Schütz/Simon (Hrsg.), *Aus Kindern wurden Briefe*, 63; Curio, *Verfolgung*, 54, 57-58..
- 14) Leverton/Lowensohn (eds.), *I Came Alone*, 13; Harris /Oppenheimer, *Into the Arms of Strangers*, 82.
- 15) すでに本連載 「東ドイツに帰国した亡命ユダヤ人たち(1)」(『成城文藝』第195号。以降「連載(1)」と表記)、141、143頁で断ったように、⑩ウルズラ・ヘルツベルクはキンダートランスポート以外で出国したが、そのような子供の出国に関する状況も本稿で対象とした。
- 16) 添乗したのは、失業した小児科医、教員や青年運動の指導者など子供を扱った経験のある人たちで、彼らは国境を越えて到着地のイギリスまで付き添う業務をになった。彼らがそのまま亡命した場合は、キンダートランスポートは中止されることになっていた。Harris/Oppenheimer, *Into the Arms of Strangers*, 112; Leverton/Lowensohn (eds.), *I Came Alone*, 360.
- 17) ヴェイスミュラー夫人はオランダの有名な銀行家の夫人である。非ユダヤ人であるが、特にオーストリアのユダヤ人および、キリスト教徒のユダヤ人の救出に尽力した。Harris/Oppenheimer, *Into the Arms of Strangers*, 112-113; Leverton/Lowensohn (eds.), *I Came Alone*, 361; Turner, Barry, *...and the Policeman smiled. 10,000 Children escape from Nazi Europe* (London, 1990), 40-43.
- 18) キンダートランスポートの子供たちの乗る汽車は専用車両が用意されたが、その費用は外国組織からの援助を受けた全国代表機関が支払った。可能であれば両親が運賃を負担することが求められた。Hill, *Anglo-Jewry and the Refugee Children*, 65-66; Göpfert, *Der jüdische Kindertransport*, 74.

- 19) 本文でも触れたように、子供の出国に際しては、医師による健康診断書が必要で、彼のような病気をもつ子供はイギリスに入国できなかった。Göpfert, *Der jüdische Kindertransport*, 72.
- 20) Kefler, Mario, *Exilerfahrung in Wissenschaft und Politik: Remigrierte Historiker in der frühen DDR* (Köln u.a., 2001), 169-170.; Leo, Anette, An diesem Verfahren stimmte was nicht, “Sudwestfunk” Baden-Baden (29.03.2005).
- 21) 出国許可の通知を受けてから出国までの期間は2日から2週間の間が平均であった。Göpfert, *Der jüdische Kindertransport*, 75.
- 22) 「連載(2)」、115-116頁。
- 23) オランダはイギリスについて、子供の引き受けに熱心だった。
- 24) 子供が貧しい身なりのためにひどい扱いを受けないよう、親が身なりを整えさせ、きちんとした家庭の子供であることを示そうと、心を配った話をバーサ・レヴァトン女史とのインタビュー(2004年8月)で聞いたことがある。このグートマン夫人の気持ちがそのようなものだったかどうかは分らないが、それまで難民としてイギリスに渡ってきた多くの貧しい「東欧系ユダヤ人」がイギリスで差別的な扱いを受けたということから、そのような難民とわが子は違うということを示そうとしたのだという。
- 25) 貴金属の供出命令は39年2月に出された。グートマン夫人はラジオで音楽を聞くことを楽しみにしていたが、39年9月20日にラジオの没収命令が出され、また時期は不明であるが花を飾るのも禁止され、彼女のわずかに残ったささやかな楽しみもことごとく奪われていった(なおドレスデンでは42年3月にユダヤ人の花の購入が禁止された)。Walk, Joseph (Hrsg.), *Das Sonderrecht für die Juden im NS-Staat. Eine Sammlung der gesetzlichen Maßnahmen und Richtlinien-Inhalt und Bedeutung* (Heidelberg, 1996), 283, 305, 366.
- 26) Gutmann, Kurt (Hrsg.), *Wer möchte nicht im Leben bleiben... über Kurt Gutmann* (Berlin, 2006), 15-16, 20-22.
- 27) Harris/Opppenheimer, *Into the Arms of Strangers*, 93, 109, 127-128; 「連載(2)」、115頁。
- 28) 「選別」とはいうまでもなく、強制収容所でガス室行きと、生かして働かせる人を「選別」したことを意味する。このような「選別」という言葉は、救う側も結局は助ける人間を選び、それが生死を決定することになったため、しばしばユダヤ人救出の際にも用いられる。
- 29) インタビューやゴラン氏の著作3冊(HP上の私家版を含む)の記述でそれぞれ数字、場所などが違う場合があるが、インタビューやその後の問い合わせでも明確にできなかった場合、多くは書籍版の著作内容に従った。Golan, Ester, *Auf Wiedersehen in unserem Land* (Düsseldorf, 1995), 28-30; Golan, E., *Pleased to meet you. Stages on the way: From Glogau to Jerusalem* (私家版 Jerusalem, 2000), 17-18; Golan, E., *Don't forget your parents* (私家

版 Jerusalem, 2001), 43-44.(この2冊の私家版は2006年9月10日に以下のサイトからダウンロードした。http://www.geocities.com/Ester_Golan/); この農場にはシオニスト以外の子供を含む約200名が収容されていた。Göpfert, *Der jüdische Kindertransport*, 124-125.

(本稿は2006年度成城大学文芸学部特別研究助成金による成果の一つである。)